

中瀬 有紀



大学院での訓練のひとつ、模型制作。
Set design, model making and lighting design for Opera *Madama Butterfly* by Yuki Nakase

秋学期も残すところ8日に迫った学期末です。アメリカ東海岸標準時の午前4時、同級生のほとんどが学校に残って徹夜作業をする中で、このニューヨークエッセイを書いています。

私は現在ニューヨーク大学大学院Tisch School of the Artsで、デザインを勉強していますが、ここでの学校生活はまるで自らの限界に挑戦する訓練を受けているようです。3年コースの2年目前期にあたる今学期は、昨年度にも増して睡眠時間が減りました。全ての時間を費やしても終わらない課題を前に、納得いく作品を提出できるよう日々自分自身と戦っています。

「もう辞めてしまおうか」と考えてもいい状況ですが、そんな邪念を吹き飛ばしてくれるのが同級生の存在です。この学校に来るまでの私は、1人の時間に集中して勉強と仕事をする性格でした。ところが今は、学校で皆と一緒に作業する毎日です。もちろん私のアパートに、横48インチ縦36インチの舞台図面と模型を広げて作業する十分な空間がないことが学校で作業する理由でもあります。なにより同級生と一緒に学ぶことが非常に助けになっています。

Robert Edmond Jones (ロバート・エド

デザインから人生を学ぶ

モンド・ジョーンズ)は、著書『The Dramatic Imagination (劇的想像力)』の中で次のように語っています。

"We have our choice of lighting a drama from the outside, as a spectator, or from the inside, as a part of the drama's experience" (119). (私たち照明デザイナーは、時に客目線で客観的に、また時に役柄に身を置き主観的に、芝居の照明デザインを設計する機会を持ち合わせている)

デザインという仕事は、空間を作ることにより他人の人生に触れ共に喜び共に涙し、そして自我と一定の距離を保つことにより、人生が自分に課している課題を見出すことのできる職業だと思います。お互いの集中を邪魔することなく、しかしお互いの弱点を一緒に解決できる同級生との関係は、照明デザイナーを目指す個々の苦しい状況から得た強い絆の証です。

2011年の1月号からニューヨークエッセイを担当させていただいて早くも1年が経ちました。執筆によりニューヨークで過ごす特別な日々を忘れずに心に刻むことができます。本誌と記事を読んでくださる皆さまに感謝の気持ちでいっぱいです。今年もどうぞよろしくお願いいたします。